◆左京三条二坊二坪(長屋王邸)の調査
―第291次

1　はじめに

奈良市二条大路南一丁目における店舗改築にともなう事前調査。発掘面積は340㎡。調査期間は1月28日～2月18日。

調査地は、平城宮跡第178次（昭和61年度）および第269-4次（平成8年度）調査区の西方、また第186次西（昭和63年度）調査区および第118-15次（昭和54年度）調査区の南方に位置し、奈良時代の平城京左京三条二坊二坪の南部にあたる。この場所は、上記の調査等により長屋王邸の中央内郭西南部にあたると想定され、とくにA期（平城遷都から養老年間頃：710～720年頃／時期区分は、奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995による。以下同。）の中央内郭西南隅の確認に主眼をおいて調査をおこなった。

調査地の層序は、調査区北部でみると、近年の盛土、耕土の下に灰色砂質土があり、その下に地山とみられる淡黄灰粘質土、橙褐粘質土がある。遺構検出はこの地山面でおこない、検出面の標高は60.15～60.20m付近。地山面は、国土方眼座標X＝-146,237～238付近で約40cm削平されるため、それ以南では同じく地山面上の検出面の標高は59.80m付近となる。削平後の地山面の直上に部

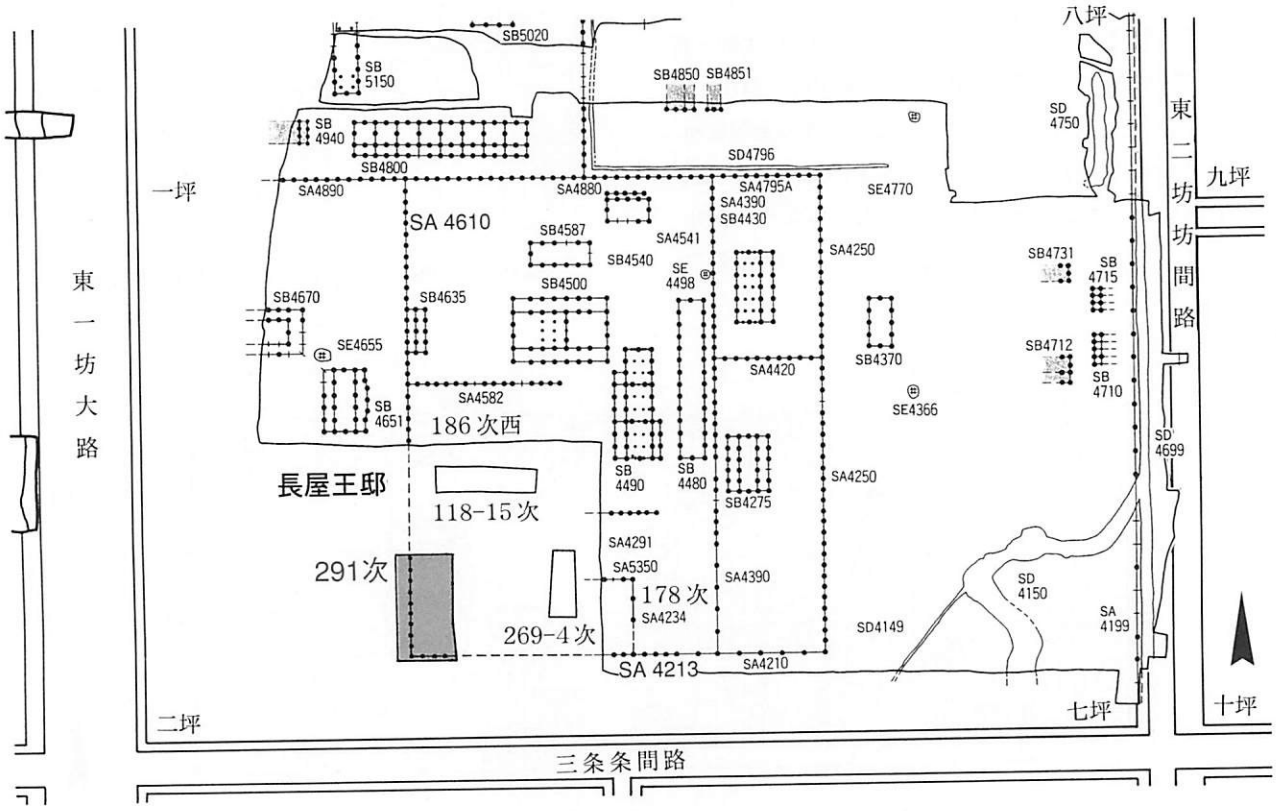

図77　第291次調査　発掘位置および周辺遺構（A期）配置図

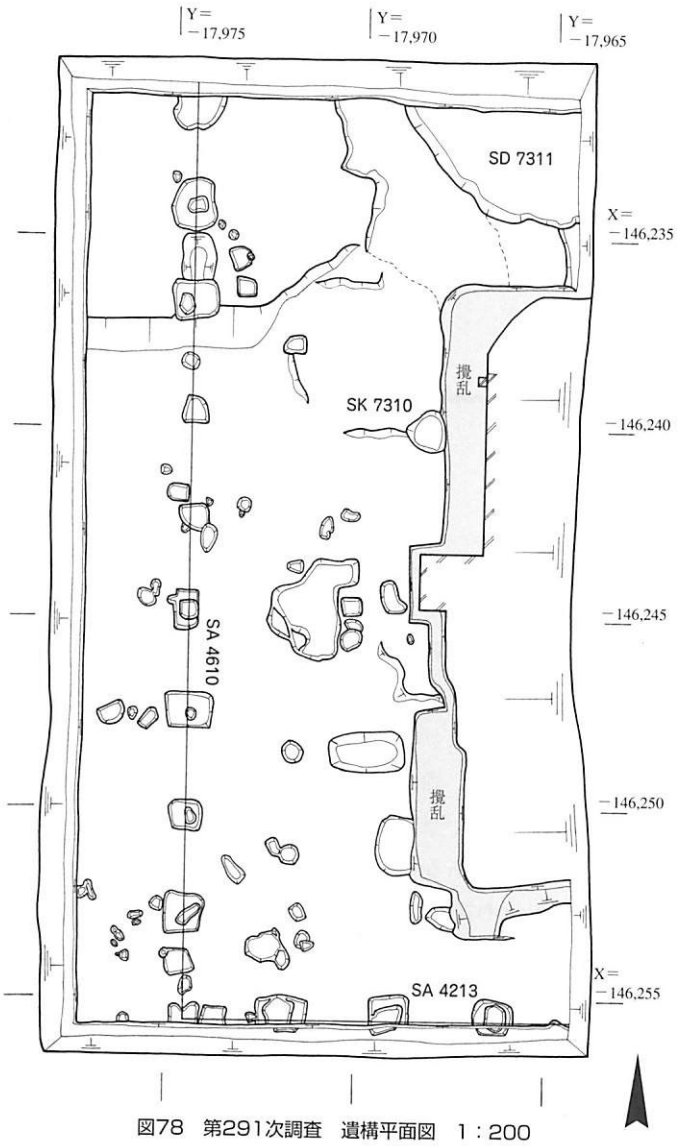

図78　第291次調査　遺構平面図　1：200

分的に遺物包含層があり、さらに削平部を埋めた暗灰褐粘質土には、奈良時代の遺物のみを若干含むことから、この削平および埋め戻しは奈良時代におこなわれた可能性が大きい。なお、調査区南東部では、削平が顕著でなく、検出面の標高は60.00～60.05mと高い。

2　検出遺構

A期の長屋王邸では、正殿SB4500や脇殿SB4480の建つ中央内郭は、南辺を掘立柱東西塀SA4213で、西辺を同南北塀SA4610で区画されていた。従前の調査においては、SA4213は、東端から2間ぶんを中央東郭南辺の掘立柱塀SA4210と同じ18尺（5.3m）等間、それ以西の6間ぶんを9尺（2.65m）等間で検出しており、またSA4610は、北端から24間ぶんを9尺（2.65m）等間で検出していた。本調査では、それぞれの延長線上でSA4213西端3間ぶんを9尺（2.65m）等間で、SA4610南端9間ぶんを9尺（2.65m）等間で検出した。SA4213とSA4610の交点、すなわちA期の中央内郭西南隅の柱心の座標値は（X＝-146,255.7，Y＝-17,974.5）であり、SA4213東端およびSA4610北端の柱心の座標値がそれぞれ（X＝-146,255.1，Y＝-17,897.6）と（X＝-146,138.6，Y＝-17,974.3）であることから、総長はSA4213が76.9m、SA4610が117.1mとなる。それぞれを9尺（2.65～2.66m）で割付けると、29間と44間になるが、SA4213は東端の2間が18尺等間であるため、18尺×2間＋9尺×25間と推定できる。

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6135	A	1	6644	B	1
	?	3		C	2
6272	B	3	6721	Ga	1
6291	Aa	1		I	1
6316	?	1		?	1
軒丸瓦計		9	軒平瓦計		6

丸瓦	
重量	29.9kg
点数	200
平瓦	
重量	60.4kg
点数	298
塼	
重量	10.5kg
点数	9
道具瓦	
熨斗瓦	4
小型平瓦	1

表16　第291次調査　出土瓦塼類集計表

SA4213、SA4610以外の奈良時代の遺構としては、瓦を集中的に投棄した土坑SK7310がある程度で、これ以外に顕著な遺構はなかった。また、奈良時代より古い時代の遺構としては、調査区北東部で古墳時代の土器をごく少量含んだ旧流路SD7311を検出した。

3　出土遺物

出土した瓦塼類は、表16のとおり。このうち、軒丸瓦6272Bと軒平瓦6644B・Cの組合せは、A期の長屋王邸所用瓦として、従来の調査でも出土している。また、6135Aは、C期（長屋王の変から平城遷都頃まで：729～745年）の瓦である。

出土した土器は、長屋王邸の時期に相当する平城宮土器Ⅱ期のものが大半を占める。これらの土器のなかには、漆の付着したものがみられ、漆運搬用および漆塗作業用の容器として用いられていたとみられる。このことは、この付近での漆工房的な施設の存在をうかがわせるが、中央内郭の内側にそのような施設の存在は考えられず、SA4213の南方に比定できよう。

4　まとめ

本調査の成果は、A期・長屋王邸の中央内郭西南隅を想定通りの位置で確認したことである。また、SA4213はA期のみ、SA4610はC期までの存続であるが、それらが破棄された後、本調査区の位置は空閑地であったことをあきらかにした。

（小野健吉）